

## 定年退官を迎えて

衛生化学分野 教授 長澤 滋 治

衛生化学講座の小山次郎教授から、北大に来ないかというお誘いがあり、冬季オリンピックで町並みを変貌しつつあった昭和46年に、住み慣れた京都から幼い娘二人の手を引いて札幌に引っ越してきました。その冬の夜、サラサラという京都では耳慣れぬ音に気がついて、木造アパートの窓を開けると、いつの間にか植木鉢がすっぽり覆い隠されるほどの積雪。さすが北国だと寒さも忘れてしばし降り積もる雪を眺めていたことをついこの前のように鮮明に思い出します。あれからもう30年。退官まで残り数カ月になり、北大で過ごしてきたこの歳月の長さや過ぎゆく時の速さにただただ驚かされるのみです。しかし、この30年という時間軸あるいは時の流れは一律ではなく、助教時代の方がゆっくりとした思い出多い流れであったのに、教授時代は文字どおりあっという間に過ぎ去ったかのようです。

前任地の大阪大学蛋白質研究所在職時は、炎症の作用ペプチドとしてキニンが注目され始めた頃で、キニン遊離系という未開拓の領域に宝探しをするスリルを楽しみながら研究をしてきました。キニン遊離に関係する3種類の蛋白質を分離することができ、キニン遊離系の全貌も明らかになってきたので、次の研究対象を探索していたところ、キニン系と同じ血液酵素系の補体系の方が未開拓な研究領域のように思えてきました。補体系は、C1、C2のように背番号が付けられた補体成分がその番号順にC1からC9まで順序正しく活性化反応を進める酵素系と考えられていましたが、少なくとも10種類を越す補体成分の中で単一蛋白質として純化されたものは二つ程度であり、血液凝固系と較べて生化学的研究が遅れていました。小山研でも補体研究を始めておられたこともあり、北大に来てからはキニン系の研究と同時に補体系の研究も始めました。幸いなことに、赤十字血液センターのご協力でヒト血液が得られ、新しい補体成分を発見するなど補体系の分子機構の解明に貢献する研究成果を挙げる事が出来ました。また、キニン系と補体系の連関を調べている過程で、PK-120と命名した蛋白質を分離する事が出来ました。新しい研究展開の手がかりをえるために、教授になってからもしばらくは実験していました。しかし、時間不足から次第に洗い場にはガラス器具等が溜まり始め、見かねた学生が洗浄せざるを得なくなるなど、殿様実験をすることは周りの学生の迷惑になることに気がつきました。また、高速液体クロマトグラフィーなどの分析機器類がコンピュータ化されるにつれ、機器の操作法が分からず学生にSOSを求めることもしばしば。追い打ちをかけるように研究テーマも時流の影響で遺伝子工学的な色彩が濃くなり、古典的な蛋白化学者は研究最前線から退却せざるを得なくなりました。

退官前の3年半は研究科長を仰せつかりました。当初は、研究科長が努まるのかと心許ない限りでしたが、幸いな事に天の配剤とでもいうのでしょうか、支援して下さる方々にも恵まれていたというのが実感です。研究科長就任直後には、大学院重点化に伴う大きな組織変革を行いました。栗原前学部長のご尽力で順調に進行しました。また、火災事故など世間知らずの身にはその対応に

戸惑うような事が多々起こりましたが、末永前事務長のお陰で無事に乗り切れました。また、教務係は修学指導やカリキュラム編成など教育面において極めて重要な部署ですが、太刀川教務係長のご努力で諸規定が完璧に近いまでに整備され、その卓抜した見識と事務処理の手際の良さにはさすがプロの事務官だと感心させられました。来春3月28日から30日の3日間札幌で開催される日本薬学会第121年会の組織委員長という大役も仰せつかっていますが、総務担当の加茂教授を初めとする組織委員会の諸先生方のお力で順調に準備が進んでおり、大船に乗ったような気しております。

しかし、まだ研究科長や6者懇の国立大学側委員としての重要な公務もあり、退官日でもある年会最終日3月30日が終わるまで、心静かに薬学部での30年間の研究・教育活動を振り返り感傷に耽る精神的余裕のないのが正直なところです。

21世紀の国立大学像がいまだ不明瞭ですが、薬学研究科としての Identity がこれまで以上に強く求められる事は確かであり、創薬に関わる総合的な研究を進める研究科として特化し、他の研究科との違いを鮮明にする事が必要と思います。同時に、大学院大学として修士課程の教育理念を明確にすることも重要課題と思います。薬学研究者としての専門教育は当然のことながら、学際的・多角的な理解力の涵養にも力を入れて欲しいと思います。

最後に、本研究科が新世紀にさらなる飛躍を遂げることを祈念すると共に、薬学研究科の教職員の皆様ならびに同窓会会員の皆様のご健康と益々のご発展をお祈りいたします。